

小さなお弔い ぷれジョブ®のねがい

長野県ぷれジョブ連絡協議会
一般社団法人ぷれジョブ

宮尾 彰
西 幸代

亡き父を弔う

縁あって、2年弱にわたって、島崎藤村原作の演劇公演『夜明け前』の制作に参加させていただきました。

これは文庫本で4冊の大作でもあり、読了する人は少ないとも言われている、藤村晩年の代表作です。

黒船襲来を契機に江戸幕府が開国を迫られ、やがて將軍慶喜による大政奉還を経て、明治維新により日本が近代化を果たす激動の時代背景と、その渦中に身を置き、木曾街道馬籠宿の当主として煩悶し続けた末に最期は家族の手で座敷牢に入れられ非業の死を遂げた藤村の父・正樹を主人公に物語は描かれています。

これは私の個人的な理解ですが、『夜明け前』を藤村自身のグリーフワーク（喪の作業、あるいは「弔い」）として読むことができます。彼は9歳で父の命により勉学のために上京し、その後ほとんど触れあう機会も無く、14歳で父の座敷牢での死を知らされました。

現代的な視点から捉えれば、マル・トリートメント（不適切な養育）の犠牲者とも、PTSD（心的外傷後ストレス障害）当事者とも想定され得る経験です。

私は今回作品を精読する作業から、特に「終の章」全体が藤村個人のグリーフワーク（お弔い）だったのにちがいない、との印象を深く受けました。

親族の証言や資料の助け無しには知り得ない父親の死を周到な調査と想像力で描き尽くした作家の執念に驚嘆すると同時に、私には物語を書く行為そのものが彼自身に自己治癒をもたらす作業だったように思われてならないのです。

「お弔い」としての役作り

不思議なのは、この普遍的なテーマを扱った今回の創作の過程で、それにかかわる俳優と私自身との間に期せずしてグリーフワークとグリーフケアという共同作業が生まれ、上演当日まで続けられたことです。

演出家を中心に、関係者全員が作品を自らの生活と突き合わせる作業を重ねました。そこにこそ、我々が今回『夜明け前』を取り上げる意味はあったのです。

ある日も、各々が作品と自分史を重ねて語り合い、

主役の青山半蔵を演じる舞台俳優も彼自身の父親との関係に少しだけ触れました。それは、別の俳優の父親への心情発露に触発されての発言でしたが、今思えばここから二人の共同作業は始まったのです。

連日、舞台本番に向けて深夜に及ぶ稽古が続く中、私は帰りがけに彼を自分の車で宿まで送ることになりました。毎回10分弱の短時間でしたが、それが稽古を離れた彼個人の「役作り」の契機となったのです。

ある晩、彼の口から亡き父との最後の別れと、父の死去を告げられた過去の経験が語り出されました。

真冬の寒気の中で、エンジンをかけた車中で会話が始まって1時間経ったころ「どうして自分が今宮尾さんにこの話をしているのかもわかりませんが…」と語る彼に、しばらく沈黙したあと私は「聴き取られることが大切なのだと思います」と答えました。

長い年月にわたって『蓋をしていた』自分の感情に人間が向き合おうとする際に、どれだけのエネルギーが必要になるのか、それを傍らで見守ることがどんな行為なのか、身をもって経験させてもらいました。

彼にとって、半蔵という主人公のひたむきな生き方とその悲劇を我が身を行って「演じ切る」ことが、自分が充分な思いを籠めて果たせないままに過ぎて来た父親との「お別れ」と「お弔い」の儀式を果たすコトに重なったのは、かけがえのない経験でした。

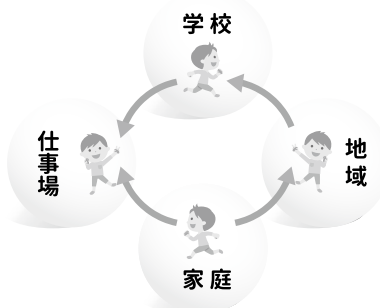
私は、俳優にとって役作りの作業がどれほど真剣で抜き差しならない行為であるかを間近に接する時間の中で教えられました。そして、カタカナで表記され、私自身も表記して来た二つの役割について、舞台公演が終わって以来、考える時間が続いています。

当事者の心の内にある「かなしみ」や「わからなさ」や「置き去りにして来た気持ち」に本人が向き合う、その横に添う誰かが居る。こんな「小さなお弔い」が誰にも必要でしょう。そこで昇華された心によって、真の供養も果たされるのでしょうか。

週1回の小さなお弔い

ぷれジョブ®は、障害のある子どもたちに1週間に1回1時間、居住地域の企業や店舗に場を借りて家族

信じてまかせて、ゆだねる社会の作り方



から自立する経験を保証するデザインであり、安価な労働力としての障害者雇用とは発想の根が異なります。

2009年地域づくり総務大臣表彰を受賞したことが示しているように、労働や賃金にかかわる厚生労働省よりも、地域活性化や市民の安全にかかわる総務省と深く関係する、独自の理念に基づいた市民活動です。

皮肉にも、法定雇用率の上昇と並行して全国に伝播したため、就労支援に紐づけられた国策による補助金獲得への誘惑にも、常にさらされ続けて来ました。

これは、子どもの権利保障に注目するあまり親自身の人権回復が後回しにされた結果だったと思います。

障害のある子の保護者や家族には、自分の中にある悪感情を処理し切れずに、子育てをその手立てに代えてしまう危険性があります。ぶれジョブ®にはお互いが危険を孕んだ近距離の関係性から無理のない頻度で解放され、子どもは人権を守られ、大人は自らの課題に向き合う時間を得るという働きがあります。活動で大きな役割を担うのは、障害でも障害者でもなく人間に興味を持つ市民（ジョブサポーター）です。つまり、「小さなお弔い」を必要とする人が居て、その行為の触媒となる人が居るというしくみです。

しかし、残念ながらかなりの割合でこの活動が権利回復のリベンジとして組織化された歴史を認めざるを得ません。これは何に起因しているのでしょうか？

科学の進歩に伴い医学的知見が日々更新され、早期発見された違いによる「就学指導」が善意から進みました。そこで保護者は、我が子が他の子から分け隔てられたことにより、秘かに疼き続ける傷を負います。

ケアがサービスへと変貌した頃から、保護者は権利を主張する消費者としての立場を得ました。我が子と自分に向けられ続けた理不尽な扱いに対する手当てのように見えるサービスが、かえって分断を加速させ、障害のある子どもを健常者の暮らす地域から見えない場所へと集めました。健常者が多数派を占める効率の高いコミュニティと、必ずしもそうではない障害者のコミュニティに二分されたのです。互いに接触経験の

ないまま、双方は「共には暮らさない心理的には不安要素の少ない二層」に分断されてしまいました。

ここ数年シニア大学でぶれジョブ®の理念を伝える場を得ています。ある時、講演後にジョブサポーターを経験された方が演台に駆け寄り、こう言われました。「今日のお話を聴き、当時自分は良かれと思い子どものスキルアップを手伝っていましたが、かえってお金優先の社会を加速させ、障害者への差別を助長することに手を貸していたことに気がつきました。社会からはじき出されたと感じる親は、子どもが生るためにジョブサポーターさえも利用します。隔離せずに安心して暮らすには、ありままで親も子どもも大切にされる経験を繰り返すことが大事だと思います。」

傷痕の手当てから人権の回復へ

週1回だけ、隣に住んでいる普通の大人がごく自然に子どもと過ごす役割を担う中で、保護者の心にある「置き去りにして来た気持ち」に寄り添えるのです。

そこには、専門家の知識も技術も必要ありません。

誰もが搾取されず、権利を侵害されず、自分の生きたいように生きることが保証されます。自分の内にある差別や被害者意識など未だ癒えないトラウマ（傷痕）への1週間に1時間の手当てが果たされるのです。

2003年の考案から20年。地域の中で緩やかにケアし合える関係が育ち、保護者も子どもも支援者も企業も、ひとしく固有の権利と意思を持つ人間として生きることを目指す地域も生まれています。

この文章を書いている今現在も、イスラエルによるパレスチナのガザ地区へのジェノサイド（集団抹殺）が継続され、全世界の何者もこの人類史上類を見ない人権侵害に歯止めをかけられないまま過ごしています。

ナチスによるユダヤ人大量殺戮の「被害の記憶」がイスラエル政府の暴力装置として働いているのです。

私たちの日常生活にも決して他人事にはできない「怨恨の産物としての暴力」が充ちています。世界と自分とは、深いかかわりを持っているのです。

1週間に1時間、我が身と心を内省すると、暴力の種のような暗い感情が自分の内にあることに気づき、それと向き合い、小さなお弔いをすることができます。

このようにして人権を回復することができた大人に出会うことにより、子どもたちの人権は守られるでしょう。

長野県事務所：〒384-0055 小諸市柏木7-35
一般社団法人ぶれジョブ HP: <https://www/purejob.net>
商標登録：一般社団法人ぶれジョブ (purejob.net)